



TITLE:

多値AND, OR, NOT, 定数, 変数によって表現される多値論理関数の必要十分条件とその論理式決定(多値論理及びその応用(4))

AUTHOR(S):

大和, 一晴; 中島, 恭一; 畑, 豊; 佐藤, 隆志

CITATION:

大和, 一晴 ...[et al]. 多値AND, OR, NOT, 定数, 変数によって表現される多値論理関数の必要十分条件とその論理式決定(多値論理及びその応用(4)). 数理解析研究所講究録 1989, 687: 124-144

ISSUE DATE:

1989-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/101247>

RIGHT:

多値AND, OR, NOT, 定数, 変数によって表現される多値論理関数の必要十分条件とその論理式決定

姫路工業大学 大和 一晴 (Kazuharu YAMATO) 中島 恭一 (Kyoichi NAKASHIMA)

畑 豊 (Yutaka HATA) 佐藤 隆志 (Takashi SATO)

1. ま え が き

多値論理関数が通常の2値論理関数に比べて取り扱いが難しくなる原因の一つに, 真理値の個数が値数の増大に対して指数的に増加することが挙げられる. 我々は, これに対して多値論理関数をより簡単に扱うことのできる2値入力 p 値出力関数⁽¹⁾ ($(2, p)$ -関数)を定義し, これを用いてある種の論理関数を解析してきた. その結果, 単調な $(2, p)$ -関数によって多値多数決関数⁽²⁾とユネイト関数⁽³⁾の論理式が決定でき, 多値多数決関数に対してはその構造も決定できることを明らかにした. また, 非単調な $(2, p)$ -関数からは p 値のAND, OR, NOT, 定数, 及び変数によって表現できる p 値論理関数 (以後, これを論理式表現された p 値論理関数と言う)の一部が解析できた.

本文では, 論理式表現される p 値論理関数全体を取り扱うために, $(2, p)$ -関数の拡張として, 入力値数を一つ増やした3値入力 p 値出力関数 ($(3, p)$ -関数)を導入し解析を行った. まず, $(3, p)$ -関数に $0 \Rightarrow 1 \Rightarrow \dots \Rightarrow \frac{p-1}{2}, p-1 \Rightarrow p-2 \Rightarrow \dots \Rightarrow \frac{p-1}{2}$ なる順序関係を定義した. この順序関係に対する単調性を満足する

(3, p) - 関数を C - 単調な (3, p) - 関数と呼ぶことにした。この関数によって次の事実を明らかにした。

① C - 単調な (3, p) - 関数と論理式表現される p 値論理関数の集合は全単射の関係にある。 ② C - 単調な (3, p) - 関数は、正則 3 値論理関数⁽⁴⁾の理論を適用して論理式決定ができる。

③ 論理式表現される p 値論理関数の論理式は C - 単調な (3, p) - 関数の論理式の単なる変数変換により決定できる。

以上の事実により、p 値論理関数 F が論理式表現される p 値論理関数であるための必要十分条件は、すべての p 値ベクトル $A_i(X_i)$ に対して $F(A_i(X_i)) = r(X_i \bar{X}_i \vee st) \vee tX_i \vee s\bar{X}_i$ を満足することであると導けた。この結果、論理式表現される p 値論理関数すべてが、この (3, p) - 関数により解析できた。

2. 基本定義と関数の論理式表現

真理値集合 $V = \{0, 1, 2, \dots, p-1\}$ とし、入力ベクトル $X = (X_1, X_2, \dots, X_n)$ の各変数が p 値論理変数で、写像 $V^n \rightarrow V^1$ である n 変数 p 値論理関数 $F(X)$ を定義する。p 値論理関数 $F(X)$ は、単に p 値関数 $F(X)$ または F と記されることがある。

$a, b \in V$ に対し、論理和 \vee 、論理積 \cdot 、否定 $\bar{}$ の各演算子は次のように定義する。

$$a \vee b = \max(a, b), \quad a \cdot b = \min(a, b)$$

$$\bar{a} = p - 1 - a$$

\cdot はしばしば省略され、記法 $\cdot, \vee, \bar{}$ はそれぞれ AND, OR, NOT と言わ

れる.

p値論理関数 $F(X)$ が, AND, OR, NOT, 変数 X_i 及びp値定数 $0, 1, 2, \dots, p-1$ のみを使って書かれるとき, $F(X)$ は論理式で表現されるという.

二つの関数 F, G に対して, 記法 $F \subseteq G$ は, $F(X)=t$ としたとき常に $G(X) \geq t$ が成り立つことを意味する. もし, $F \subseteq G$ かつ $G \supseteq F$ ならば, F と G は等しいといい, $F=G$ と書く. 記法 $F \subset G$ は $F \subseteq G$ かつあるベクトル Y に対して $F(Y) < G(Y)$ であることを意味する.

ここで, p値論理関数 $F(X)$ が, 論理式で表現されるとき性質を次に与える.

[定理 1] p値入力ベクトル $A_i(X_i) = (a_1, \dots, a_{i-1}, X_i, a_{i+1}, \dots, a_n)$ とし, $(a_1, \dots, a_{i-1}, a_{i+1}, \dots, a_n)$ を固定したベクトルと見なす. p値関数 $F(X)$ が論理式で表現されているとき, 任意のp値ベクトル $A_i(X_i)$ に対し次の関係式をもつ.

$$F(A_i(X_i)) = r(X_i \bar{X}_i \vee s t) \vee t X_i \vee s \bar{X}_i \quad (1)$$

但し, $r = F(A_i(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor))$, $s = F(A_i(0))$, $t = F(A_i(p-1))$ とする. $\lfloor x \rfloor$ は, x を越えない最大整数とする.

(証明) 論理式で表現されているp値論理関数 $F(X)$ は, 次の関係を満足する.

$$F(A_i(X_i)) = a X_i \bar{X}_i \vee b X_i \vee c \bar{X}_i \vee d \quad (a, b, c, d \in \{0, 1, \dots, p-1\}) \quad (2)$$

(2)式に $X_i = 0, \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor, p-1$ を代入し, それぞれを s, t, r とする.

$$F(A_i(0)) = c \vee d = s, \quad F(A_i(p-1)) = b \vee d = t.$$

$p = 2m (m = 2, 3, \dots)$ の場合,

$$F(A_i(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor)) = (a \vee b) \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \vee c(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1) \vee d = r$$

$p = 2m-1 (m = 2, 3, \dots)$ の場合,

$$F(A_i(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor)) = (a \vee b \vee c) \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \vee d = r$$

これらの値を(1)式に代入したとき, (2)式と等価であることを証明する.

$p=2m(m=2,3,\dots)$ のとき,

$$\begin{aligned} & \{(a \vee b)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee c(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1) \vee d\} \{X_i \bar{X}_i \vee (c \vee d)(b \vee d)\} \vee (b \vee d)X_i \vee (c \vee d)\bar{X}_i \\ &= \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor aX_i \bar{X}_i \vee bX_i \vee c\bar{X}_i \vee bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1) \vee (a \vee b)(c \vee d)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee d \\ &= \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor aX_i \bar{X}_i \vee bX_i \vee c\bar{X}_i \vee bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1) \vee d \end{aligned} \quad (3)$$

$p=2m-1(m=2,3,\dots)$ のとき,

$$\begin{aligned} & \{(a \vee b \vee c)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee d\} \{X_i \bar{X}_i \vee (c \vee d)(b \vee d)\} \vee (b \vee d)X_i \vee (c \vee d)\bar{X}_i \\ &= \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor aX_i \bar{X}_i \vee bX_i \vee c\bar{X}_i \vee \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor (a \vee b \vee c)bc \vee d \\ &= \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor aX_i \bar{X}_i \vee bX_i \vee c\bar{X}_i \vee bc^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee d \end{aligned} \quad (4)$$

ここで, (3), (4)式が(2)式と等価であることを証明する.

$X_i \bar{X}_i \subseteq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ であるので, $aX_i \bar{X}_i = \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor aX_i \bar{X}_i$.

定数項については次の関係が成り立つ.

(i) $p=2m(m=2,3,\dots)$ のとき,

$$b, c \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1)$$

$$b, c \leq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset bc \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1)$$

$$b \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 > c \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset c(X_i \vee \bar{X}_i) \supset c \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1)$$

$$c \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 > b \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset b(X_i \vee \bar{X}_i) \supset b \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1)$$

(ii) $p=2m-1(m=2,3,\dots)$ のとき,

$$b, c \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \supset bc^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor}$$

$$b, c \leq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset bc \supset bc^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor}$$

$$b \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor > c \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset c(X_i \vee \bar{X}_i) \supset c \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor)$$

$$c \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor > b \text{ のとき, } bX_i \vee c\bar{X}_i \supset b(X_i \vee \bar{X}_i) \supset b \supset bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor)$$

(i), (ii) より $bc(\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1)$, または $bc \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ は, 項 $bX_i \vee c\bar{X}_i$ に吸収される. 従って(3),(4)式は(2)式と等価である. (証明終)

次に, 全ての p 値入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対し, (1)式の関係が成立する関数は, 論理式で表現されるか否かを考える. そのために 3. 以下の議論をする.

3. 3 値入力多値出力関数とその性質

真理値集合 $T = \{0, \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor, p-1\}$ とする. $p=2m-1 (m=2, 3, \dots)$ に対しては写像 $T^n \rightarrow V^1$ である n 変数 3 値入力 p 値出力関数 f を定義する. 一方, $p=2m (m=2, 3, \dots)$ に対しては新しい真理値集合 $V' = \{0, \dots, \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor, \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1, \dots, p-1\}$ とし (このとき $\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ は整数ではない), 写像 $T^n \rightarrow V'^1$ である 3 値入力 $p+1$ 値出力関数 f' を定義する. ここでは, f, f' をまとめて簡単に $(3, p)$ -関数 $f(x)$ と記す. 但し, $x = (x_1, x_2, \dots, x_n) \in T^n$ は入力ベクトルである.

次に, 半順序関係 " \Rightarrow " を定義する.

[定義 1] V (または V') 上で半順序関係 " \Rightarrow " を次のように定義する.

$$\textcircled{1} \quad 0 \Rightarrow 1 \Rightarrow \dots \Rightarrow \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor, \quad p-1 \Rightarrow p-2 \Rightarrow \dots \Rightarrow \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$$

また, T 上でも半順序関係を次のように定義する.

$$\textcircled{2} \quad 0 \Rightarrow \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor, \quad p-1 \Rightarrow \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$$

さらに, 二つの異なるベクトル $x = (x_1, \dots, x_n), y = (y_1, \dots, y_n) (x, y \in T^n)$ において, すべての i に対して $x_i \Rightarrow y_i$ が成り立つとき $x \Rightarrow y$ と記す. もし, $x \Rightarrow y$ あるいは $y \Rightarrow x$ が成り立つとき x と y は比較可能であるといい, そうでないとき比較不能であるという.

[定義2] $(3, p)$ -関数 $f(x)$ が次の条件を満たすとき $f(x)$ は C -単調であるという.

$$x \Rightarrow y \text{ ならば } f(x) \Rightarrow f(y)$$

C -単調は3値論理関数における正則性⁽⁴⁾の1つの拡張になっている.

$(3, p)$ -関数 $f(x)$ が3値変数 x_1, x_2, \dots, x_n , 定数 $0, 1, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1$ 及び論理演算子 AND, OR, NOT から構成されるとき, $f(x)$ は論理式で表現されるという.

ここで, C -単調な $(3, p)$ -関数は論理式で表現されるかどうかを考える.

まず, $(3, p)$ -関数を $p=2m-1$ の場合は $p-1$ 個の3値論理関数に, また $p=2m$ の場合は p 個の3値論理関数に分離し, それらの3値論理関数が論理式で表現される(すなわち正則3値論理関数となる)ことを示す. 最終的に C -単調な $(3, p)$ -関数が論理式表現されることを示す.

次のような3値関数 $f_k^3(x): \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n \rightarrow \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^1$ ($k=1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1$) を C -単調な $(3, p)$ -関数 $f(x)$ から導出する.

(i) $0 < k < \frac{p-1}{2}$ の場合

$$f_k^3(x) = \begin{cases} 0 & f(x) \leq k-1 \text{ (} f(x) \Rightarrow k-1 \text{) のとき} \\ \frac{p-1}{2} & \text{その他のとき} \end{cases}$$

(ii) $k = \frac{p-1}{2}$ の場合

$p=2m$ のとき

$$f_k^3(x) = \begin{cases} 0 & f(x) \leq \frac{p-1}{2} \text{ (} f(x) \Rightarrow \frac{p-1}{2} \text{) のとき} \\ \frac{p-1}{2} & \text{その他のとき} \end{cases}$$

$p=2m-1$ のとき

$$f_k^3(x) = \begin{cases} 0 & f(x) \leq \frac{p-1}{2} - 1 \text{ (} f(x) \Rightarrow \frac{p-1}{2} - 1 \text{) のとき} \\ \frac{p-1}{2} & \text{その他のとき} \end{cases}$$

(iii) $\frac{p-1}{2} < k \leq p-1$ の場合

$$f_k^3(x) = \begin{cases} 0 & f(x) < \frac{p-1}{2} \text{ のとき} \\ \frac{p-1}{2} & \frac{p-1}{2} \leq f(x) < k \text{ のとき} \\ p-1 & f(x) \geq k \text{ (} f(x) \Rightarrow k \text{) のとき} \end{cases}$$

ここで示された3値関数 $f_k^3(x)$ は、写像： $\{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n \rightarrow \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^1$ の関数である。この3値関数 $f_k^3(x)$ は半順序関係 $0 \Rightarrow \frac{p-1}{2}$, $p-1 \Rightarrow \frac{p-1}{2}$ を有する正則3値論理関数と考えることができる。正則3値論理関数は向殿によって定義され、その性質が詳しく論じられている⁽⁴⁾。これに関して次のような事実が証明されている。

【補題1】⁽⁴⁾ 3値関数 $f_k^3(x) : \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n \rightarrow \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^1$ が次の関係を満足するとき、 $f_k^3(x)$ は3値変数、定数 $0, \frac{p-1}{2}, p-1$ 、及び p 値AND, OR, NOTの結合で表現され、これを論理式表現されるという。

(1): $x \Rightarrow y$ なるすべての x に対して $f_k^3(x) \Rightarrow f_k^3(y)$

(2): $x \Rightarrow y$ ($f_k^3(y) \in \{0, p-1\}$)なるすべての x に対して $f_k^3(y) = f_k^3(x)$

但し、文献(4)では $0, \frac{p-1}{2}, p-1$ はそれぞれ $0, 1/2, 1$ で、また論理演算子は3値のAND, OR, NOTで記述してある。

ここで、次の定理を証明する。

【定理2】 C-単調な $(3, p)$ -関数から導出された3値論理関数 $f_k^3(x)$ は、論理式で

表現される.

(証明) $(3, p)$ -関数 $f(x)$ に関し, 次の記述を使用する.

$\{f^{-1}(i)\}$ $f(x)=i$ なる入力ベクトルの集合

$\{f^{-1}(\geq i)\}$ $f(x)\geq i$ なる入力ベクトルの集合

$\{f^{-1}(\leq i)\}$ $f(x)\leq i$ なる入力ベクトルの集合

(1) $0 < k < \frac{p-1}{2}$ の場合

$0 < i \leq k$ なる任意の i を考える. 任意のベクトル $A \in \{f^{-1}(i-1)\}$ と $B \Rightarrow A$ であるすべての入力ベクトル B は $\{f^{-1}(\leq i-1)\}$ 内に存在する. このときすべてのベクトル B に対して $f_k^3(A) = f_k^3(B) = 0$ となる. 従って $f_k^3(x)$ は, 補題 1 の条件(2)を満足する. だから $f_k^3(x)$ は, 論理式で表現される.

(2) $k = \frac{p-1}{2}$ の場合

$p=2m$ のときは $\{f^{-1}(\frac{p-1}{2})\}$ と $\{f^{-1}(\leq \frac{p-1}{2})\}$ を考え(1)と同様に証明される.

$p=2m-1$ のときは $\{f^{-1}(\frac{p-1}{2}-1)\}$ と $\{f^{-1}(\leq \frac{p-1}{2}-1)\}$ を考え(1)と同様に証明される.

(3) $\frac{p-1}{2} < k \leq p-1$ の場合

$k \leq i \leq p-1$ なる任意の i を考える. 任意のベクトル $A \in \{f^{-1}(i)\}$ と $B \Rightarrow A$ なるすべての B は $\{f^{-1}(\geq i)\}$ 内に存在する. このとき, すべてのベクトル B にたいして $f_k^3(A) = f_k^3(B) = p-1$ となる. 一方, $0 < j < \frac{p-1}{2}$ なる任意の j を考え, 任意のベクトル $C \in \{f^{-1}(j)\}$ と $D \Rightarrow C$ なるすべての D は $\{f^{-1}(\leq j)\}$ 内に存在する. このとき, すべてのベクトル D にたいして $f_k^3(C) = f_k^3(D) = 0$ となる.

以上より, $f_k^3(x)$ は, 補題 1 の条件(2)を満足する.

(証明終)

定理 2 では, C -単調な $(3, p)$ -関数から導出された 3 値論理関数 $f_k^3(x)$ ($k=1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1$) は, すべて論理式で表現されることを示した. $f_k^3(x)$ は, その導出方

法より次の関係を満足している.

$$f_1^3(x) \supseteq f_2^3(x) \supseteq \cdots \supseteq f_{\frac{p-1}{2}}^3(x), \text{ かつ } f_{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1}^3(x) \supseteq f_{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 2}^3(x) \supseteq \cdots \supseteq f_{p-1}^3(x)$$

次に, C-単調な(3, p)-関数の論理式決定法を考える. 今, C-単調な(3, p)-関数から導出された3値論理関数 $f_k^3(x)$ ($k=1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1$)の論理式を $L_k^3(x)$ ($k=1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1$)で与える. このとき, 次の定理が成立する.

[定理3] C-単調な(3, p)-関数 $f(x)$ は, 次の論理式 $L^{(3, p)}(x)$ で表現される.

$$L^{(3, p)}(x) = 1L_1^3(x) \vee 2L_2^3(x) \vee \cdots \vee \frac{p-1}{2}L_{\frac{p-1}{2}}^3(x) \vee \cdots \vee (p-1)L_{p-1}^3(x)$$

$$\text{但し, } L_1^3(x) \supseteq L_2^3(x) \supseteq \cdots \supseteq L_{\frac{p-1}{2}}^3(x) \text{ かつ } L_{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1}^3(x) \supseteq \cdots \supseteq L_{p-1}^3(x)$$

(証明) $f_k^3(x)$ の導出の方法から

$$f_1^3(x) \supseteq f_2^3(x) \supseteq \cdots \supseteq f_{\frac{p-1}{2}}^3(x) \text{ かつ } f_{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1}^3(x) \supseteq \cdots \supseteq f_{p-1}^3(x)$$

が成り立つ. それゆえ,

$$L_1^3(x) \supseteq L_2^3(x) \supseteq \cdots \supseteq L_{\frac{p-1}{2}}^3(x) \text{ かつ } L_{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1}^3(x) \supseteq \cdots \supseteq L_{p-1}^3(x)$$

(1) $0 < q < \frac{p-1}{2}$ なる真理値 q を考える.

任意のベクトル $A \in \{f^{-1}(q)\}$ に対しては, 次の関係が成り立っている.

$$1L_1^3(A) \vee 2L_2^3(A) \vee \cdots \vee (q-1)L_{q-1}^3(A) \leq q-1$$

$$qL_q^3(A) = q$$

$$(q+1)L_{q+1}^3(A) \vee \cdots \vee \frac{p-1}{2}L_{\frac{p-1}{2}}^3(A) \vee \cdots \vee (p-1)L_{p-1}^3(A) = 0$$

従って, $L^{(3, p)}(A) = q$.

(2) $q = \frac{p-1}{2}$ のとき, 任意のベクトル $A \in \{f^{-1}(\frac{p-1}{2})\}$ に対し,

$$1L_1^3(A) \vee 2L_2^3(A) \vee \cdots \vee (\frac{p-1}{2}-1)L_{\frac{p-1}{2}-1}^3(A) < \frac{p-1}{2}$$

$$L_{\frac{p-1}{2}}^{p-1}(A) = \frac{p-1}{2}$$

$$(\frac{p-1}{2} + 1)L_{\frac{p-1}{2}+1}^{p-1}(A) \vee \dots \vee (p-1)L_{p-1}^{p-1}(A) = \frac{p-1}{2}$$

従って, $L^{(3,p)}(A) = \frac{p-1}{2}$.

(3) $\frac{p-1}{2} < q \leq p-1$ のとき, 任意のベクトル $A \in \{f^{-1}(q)\}$ に対し,

$$1L_1^3(A) \vee 2L_2^3(A) \vee \dots \vee \frac{p-1}{2}L_{\frac{p-1}{2}}^3(A) \vee \dots \vee (q-1)L_{q-1}^3(A) \leq q-1$$

$$qL_q^3(A) = q$$

$$(q+1)L_{q+1}^3(A) \vee (q+2)L_{q+2}^3(A) \vee \dots \vee (p-1)L_{p-1}^3(A) = \frac{p-1}{2}$$

従って, $L^{(3,p)}(A) = q$.

(証明終)

4. 論理式表現されるための必要十分条件とその論理式決定法

ここで, 再び話を戻して, p 値論理関数 $F(X)$ がすべての入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対し (1) 式を満足する関数は, 論理式表現できるか否かを議論する. 初めに $p=2m-1$ ($m=2, 3, \dots$) の場合について議論する.

(1) $p=2m-1$ の場合

この場合は, 3 値ベクトル集合 $\{x \mid x \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n\}$ が p 値ベクトル集合 $\{X \mid X \in \{0, 1, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1\}^n\}$ の部分集合となっているため簡単に議論することができる.

〔定理 4〕 すべての入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対して (1) 式を満足する p 値論理関数 $F(X)$ を考える. 入力ベクトル $A(A \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n)$ に対する出力 $F(A)$ 上の $(3, p)$ -関数 $f(x)$ は, C -単調である.

(証明) $f(x)$ がすべての入力ベクトル $x \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n$ に対して(1)式を満足しているのは明らか. よって, この定理を証明するには(1)式において $t \Rightarrow r$ かつ $s \Rightarrow r$ を満たしていることが言えれば十分である.

今, $s = F(A_i(0)), t = F(A_i(p-1)), r = F(A_i(\frac{p-1}{2}))$ として, $F(A_i(X_i)) = r(X_i \bar{X}_i \vee st) \vee tX_i \vee s\bar{X}_i$ であるならば,

$$F(A_i(\frac{p-1}{2})) = \frac{p-1}{2} (r \vee s \vee t) \vee rst = r \quad (5)$$

を満たしていなければならない.

(i) $t, s \geq \frac{p-1}{2}$ の場合

このとき, (5)式を満足するためには $r \geq \frac{p-1}{2}$ かつ $rst = r$ でなければならない. よって $r \geq \frac{p-1}{2}$ かつ $r \leq t, s$ が導かれる. これは, $t \Rightarrow r$ かつ $s \Rightarrow r$ を満たしている.

(ii) $t \geq \frac{p-1}{2} \geq s$ の場合

このとき, (5)式は $\frac{p-1}{2} (r \vee t) \vee rs = r$ となりこれを満足するためには $\frac{p-1}{2} \vee rs = r$ でなければならない. よって $r = \frac{p-1}{2}$ が導かれる. これは $t \Rightarrow r$ かつ $s \Rightarrow r$ を満たしている.

(iii) $t \leq \frac{p-1}{2} \leq s$ の場合

このときは, (ii) の場合と同じ方法で証明できる.

(iv) $t, s < \frac{p-1}{2}$ の場合

このとき, (5)式を満足するためには $r < \frac{p-1}{2}$ かつ $r \geq t \vee s$ でなければならない.

これは $t \Rightarrow r$ かつ $s \Rightarrow r$ を満たしている.

(証明終)

(2) $p = 2m$ の場合

値数 p が偶数値 $2m$ ($m=2, 3, \dots$) である p 値論理関数の場合には, 値 $\frac{p-1}{2}$ は整数にならないので値 $\frac{p-1}{2}$ は真理値集合 V には存在しない. そのため $2m$ 値論理関数 $F(X)$ の V

に $\frac{p-1}{2}$ を加えた真理値集合 $V' = \{0, 1, 2, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1\}$ を考え、写像: $V'^n \rightarrow V'^1$ なる $(2m+1)$ 値論理関数 $F'(X')$ を生成する。この場合、 $F'(X')(X' \in V'^n)$ を次に述べる生成規則によって生成する。

$(2m+1)$ 値論理関数 $F'(X')$ の生成規則

$(2m+1)$ 値入力ベクトル $A_i'(X_i') = (a_1, \dots, a_{i-1}, X_i, a_{i+1}, \dots, a_n)$ とし、 $(a_1, \dots, a_{i-1}, a_{i+1}, \dots, a_n) \in V'^{n-1}$ はある値に固定する。 $(2m+1)$ 値論理関数 $F'(X')$ のすべての出力値はすべての入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対して (1) 式を満足する $2m$ 値論理関数 $F(X)$ の出力値を使って次の手順で決定される。

手順 0 入力ベクトル $X' = X \in V^n$ に対する F' の出力値 $F'(X')$ は $F(X)$ と等しいものとする。

手順 1 手順 0 で得られた $F'(A_i'(0)) = s, F'(A_i'(\frac{p-1}{2})) = r, F'(A_i'(p-1)) = t$ を (1) 式に代入して $A_i(\frac{p-1}{2}) ((a_1, \dots, a_{i-1}, a_{i+1}, \dots, a_n) \in V'^{n-1})$ の出力 $F'(A_i'(\frac{p-1}{2}))$ を決定する。すべての $F'(A_i'(\frac{p-1}{2}))(1 \leq i \leq n)$ を得るためにすべての i についてこれを行う。 $k=2$ として手順 k に進む。

手順 $k(2 \leq k \leq n)$ $I_k = \{i_1, i_2, \dots, i_k\}$ を $\{1, 2, \dots, n\}$ の部分集合として任意の $i \in I_k$ を選出する。 $j \in I_k (j \neq i)$ に対しては、 $a_j = \frac{p-1}{2}$ であり、 $j \notin I_k$ に対しては $a_j \in V$ であるようなベクトル $A_i'(\frac{p-1}{2}) = (a_1, \dots, a_{i-1}, \frac{p-1}{2}, a_{i+1}, \dots, a_n)$ を考える。このとき、手順 $k-1$ で得られた $F'(A_i'(0)) = s, F'(A_i'(\frac{p-1}{2})) = r, F'(A_i'(p-1)) = t$ の値から (1) 式を使って $F(A_i'(\frac{p-1}{2}))$ を決定する。これをすべての部分集合 I_k に対して繰り返し行う。

$k \leftarrow k+1$ とし、 $k \neq n+1$ のときは手順 k を繰り返し、 $k = n+1$ のときは終了する。

この生成規則によって一つの $2m$ 値関数 $F(X)$ から $(2m+1)$ 値関数 $F'(X')$ を生成すると

き、手順 k においてどのように i を選択してもただ一つの $(2m+1)$ 値関数 $F'(X')$ しか生成されない。すなわち、次の定理が成り立つ。

【定理5】 すべての p 値ベクトル $A_i(X_i)$ に対して(1)式が成り立つような $2m$ 値関数 $F(X)$ を考える。このときどのように生成規則を使ってもただ一つの $(2m+1)$ 値関数 $F'(X')$ しか生成されない。さらに生成された $F'(X')$ は、すべての $(2m+1)$ 値ベクトル $A_i'(X_i')$ に対して(1)式が成立する。

(証明) 入力ベクトル $X'=X \in V^n$ に対する出力値 $F'(X')$ は(1)式を満たす。よって入力ベクトル $B \in \{X' | X' \in V'^n \text{ かつ } X' \not\in V^n\}$ に対する出力値 $F(B)$ について言えば十分である。この定理を証明するには $F'(A_{ij}(0, \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(p-1, \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2}))$ から得られる $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$ と $F'(A_{ij}(X_i', 0))$, $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(X_i', p-1))$ から(1)式を使って得られる $F'(A_{ij}(X_i', X_j'))$ に $X_j' = \frac{p-1}{2}$ を代入して得た $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$ が等しいことと, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, 0))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, p-1))$ から得られる $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$ と $F'(A_{ij}(0, X_j'))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$, $F'(A_{ij}(p-1, X_j'))$ から(1)式を使って得られる $F'(A_{ij}(X_i', X_j'))$ に $X_i' = \frac{p-1}{2}$ を代入して得られる $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$ が等しいことを証明すればよい。ただし, $(2m+1)$ 値ベクトル $A_{ij}(X_i', X_j') = (a_1, \dots, a_{i-1}, X_i', a_{i+1}, \dots, a_{j-1}, X_j', a_{j+1}, \dots, a_n)$ とし, $(a_1, \dots, a_{i-1}, a_{i+1}, \dots, a_{j-1}, a_{j+1}, \dots, a_n) \in V'^{n-2}$ はある値に固定している。

いま, $F'(A_{ij}(0, 0)) = a$, $F'(A_{ij}(0, p-1)) = b$, $F'(A_{ij}(p-1, 0)) = c$,
 $F'(A_{ij}(p-1, p-1)) = d$, $F'(A_{ij}(0, \frac{p-1}{2})) = e_1$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, 0)) = e_2$,
 $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, p-1)) = e_3$, $F'(A_{ij}(p-1, \frac{p-1}{2})) = e_4$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2})) = f$ とする。

$$F'(A_{ij}(0, X_j')) = e_1(X_j' \bar{X}_j' \vee ab) \vee bX_j' \vee a\bar{X}_j' \quad (6)$$

$$F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j')) = f(X_j' \bar{X}_j' \vee e_2 e_3) \vee e_3 X_j' \vee e_2 \bar{X}_j' \quad (7)$$

$$F'(A_{ij}(p-1, X_j')) = e_4(X_j' \bar{X}_j' \vee cd) \vee dX_j' \vee c\bar{X}_j' \quad (8)$$

(6), (7), (8)式より $F'(A_{ij}(0, \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(p-1, \frac{p-1}{2}))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2}))$ は,

$$F'(A_{ij}(0, \frac{p-1}{2})) = (e_1 \vee a \vee b)^{\frac{p-1}{2}} \vee abe_1$$

$$F'(A_{ij}(p-1, \frac{p-1}{2})) = (e_4 \vee c \vee d)^{\frac{p-1}{2}} \vee cde_4$$

$$F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2})) = (f \vee e_2 \vee e_3)^{\frac{p-1}{2}} \vee e_2 e_3 f$$

上式より(1)式を使って $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$ がつぎのように得られる.

$$\begin{aligned} F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2})) &= \{(f \vee e_2 \vee e_3)^{\frac{p-1}{2}} \vee fe_2 e_3\} [X_i' \bar{X}_i' \vee \{(e_1 \vee a \vee b)^{\frac{p-1}{2}} \vee \\ &abe_1\} \{(e_4 \vee c \vee d)^{\frac{p-1}{2}} \vee cde_4\}] \vee \{(e_4 \vee c \vee d)^{\frac{p-1}{2}} \vee cde_4\} X_i' \vee \{(e_1 \vee a \vee b)^{\frac{p-1}{2}} \\ &\vee abe_1\} \bar{X}_i' \end{aligned} \quad (9)$$

一方, $F'(A_{ij}(X_i', X_j'))$ は $F'(A_{ij}(X_i', 0))$, $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$ 及び, $F'(A_{ij}(X_i', p-1))$ から

(1)式を使って次のように得られる.

$$\begin{aligned} F'(A_{ij}(X_i', X_j')) &= \{f(X_i' \bar{X}_i' \vee e_1 e_4) \vee e_4 X_i' \vee e_1 \bar{X}_i'\} [X_j' \bar{X}_j' \vee \{e_2(X_i' \bar{X}_i' \vee ac) \\ &\vee cX_i' \vee a\bar{X}_i'\} \{e_3(X_i' \bar{X}_i' \vee bd) \vee dX_i' \vee b\bar{X}_i'\}] \vee \{e_3(X_i' \bar{X}_i' \vee bd) \vee dX_i' \vee \\ &b\bar{X}_i'\} X_j' \vee \{e_2(X_i' \bar{X}_i' \vee ac) \vee cX_i' \vee a\bar{X}_i'\} \bar{X}_j' \end{aligned}$$

$X_j' = \frac{p-1}{2}$ を代入して, $F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2}))$ は次のようになる.

$$\begin{aligned} F'(A_{ij}(X_i', \frac{p-1}{2})) &= \{f(X_i' \bar{X}_i' \vee e_1 e_4) \vee e_4 X_i' \vee e_1 \bar{X}_i'\} [\frac{p-1}{2} \vee \{e_2(X_i' \bar{X}_i' \vee ac) \vee \\ &cX_i' \vee a\bar{X}_i'\} \{e_3(X_i' \bar{X}_i' \vee bd) \vee dX_i' \vee b\bar{X}_i'\}] \vee \{e_3(X_i' \bar{X}_i' \vee bd) \vee dX_i' \vee b\bar{X}_i'\}^{\frac{p-1}{2}} \\ &\vee \{e_2(X_i' \bar{X}_i' \vee ac) \vee cX_i' \vee a\bar{X}_i'\}^{\frac{p-1}{2}} \end{aligned} \quad (10)$$

ここで(9)式と(10)式が等しいことを次のように変数 X_i' , \bar{X}_i' , $X_i' \bar{X}_i'$ の係数及び定数

が等しいことを示すことによって証明する.

$$(9) \text{式の } X_i' \text{ の係数} = (e_4 \vee c \vee d)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee cde_4$$

$$(10) \text{式の } X_i' \text{ の係数} = (e_4 \vee c \vee d)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee abcde_2e_3e_4 \vee acde_2e_4 \vee bcde_3e_4 \vee cde_4 \vee acde_1e_2e_4 \vee bcde_1e_3e_4 \vee cdf e_1e_4 = (e_4 \vee c \vee d)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee cde_4$$

よって, (9)式の X_i' の係数 = (10)式の X_i' の係数.

$$(9) \text{式の } \bar{X}_i' \text{ の係数} = (e_1 \vee a \vee b)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee abe_1$$

$$(10) \text{式の } \bar{X}_i' \text{ の係数} = (e_1 \vee a \vee b)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee abcde_1e_2e_3 \vee abce_1e_2e_4f \vee abde_1e_3e_4f \vee abe_1e_4f \vee abce_1e_2 \vee abde_1e_3 \vee abe_1 = (e_1 \vee a \vee b)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee abe_1$$

よって, (9)式の \bar{X}_i' の係数 = (10)式の \bar{X}_i' .

$$(9) \text{式の } X_i' \bar{X}_i' \text{ の係数} = (f \vee e_2 \vee e_3)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee fe_2e_3 \quad (11)$$

$$(10) \text{式の } X_i' \bar{X}_i' \text{ の係数} = (f \vee e_2 \vee e_3)^{\lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor} \vee (f \vee e_4 \vee e_1)(e_3 \vee d \vee b)(e_2 \vee a \vee c) \quad (12)$$

$f \vee e_2 \vee e_3 \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ のときは, $X_i' \bar{X}_i' \subseteq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ が常に成り立っているので,

$$(11) \text{式 } X_i' \bar{X}_i' = (12) \text{式 } X_i' \bar{X}_i' = X_i' \bar{X}_i' \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor.$$

いま, $r = F'(A_i \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor)$, $s = F'(A_i (0))$, $t = F'(A_i (p-1))$ としたとき, $F'(A_i (X_i')) = r(X_i' \bar{X}_i' \vee st) \vee tX_i' \vee s\bar{X}_i'$ を満たすような r, s, t を考える. 定理4の証明と同じ方法で次の関係を得ることができる.

$$t, s \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 \longrightarrow r \geq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \text{ かつ } r \leq st \quad (13)$$

$$t > \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \geq s \longrightarrow r = \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \quad (14)$$

$$t \leq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor < s \longrightarrow r = \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor + 1 \quad (15)$$

$$t, s \leq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \longrightarrow r \leq \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor \text{ かつ } r \geq s \vee t \quad (16)$$

よって $f \vee e_2 \vee e_3 < \lfloor \frac{p-1}{2} \rfloor$ のときは, (16)式より $f \geq e_1 \vee e_4$, $e_3 \geq b \vee d$ かつ $e_2 \geq a \vee c$

なる関係を満たしている。よって(11)式=(12)式 $= (f \vee e_2 \vee e_3)^{\frac{p-1}{2}} \vee fe_2e_3$ が成り立つ。

$$(9)\text{式の定数項} = \frac{p-1}{2} (f \vee e_2 \vee e_3)(e_1 \vee a \vee b)(e_4 \vee c \vee d) \vee abcde_1e_2e_3e_4f \quad (17)$$

$$(10)\text{式の定数項} = \frac{p-1}{2} (fe_1e_4 \vee e_2ac \vee e_3bd) \vee abcde_1e_2e_3e_4f \quad (18)$$

定数項においては、まず a, b, c, d の値の取り方を次の6つに分類する。① $a, b, c, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ の場合、② $a, b, c, d \leq \frac{p-1}{2}$ の場合、③ $a \leq \frac{p-1}{2}$ かつ $b, c, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $b \leq \frac{p-1}{2}$ かつ $a, c, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $c \leq \frac{p-1}{2}$ かつ $a, b, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $d \leq \frac{p-1}{2}$ かつ $a, b, c \geq \frac{p-1}{2} + 1$ の場合、④ $a \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $b, c, d \leq \frac{p-1}{2}$, $b \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $a, c, d \leq \frac{p-1}{2}$, $c \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $a, b, d \leq \frac{p-1}{2}$, $d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $a, b, c \leq \frac{p-1}{2}$ の場合、⑤ $a, b \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $c, d \leq \frac{p-1}{2}$, $b, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $c, a \leq \frac{p-1}{2}$, $c, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $b, a \leq \frac{p-1}{2}$, $c, a \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $b, d \leq \frac{p-1}{2}$ の場合、⑥ $a, d \leq \frac{p-1}{2}$ かつ $b, c \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $a, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ かつ $b, c \leq \frac{p-1}{2}$ の場合である。

たとえば、① $a, b, c, d \geq \frac{p-1}{2} + 1$ の場合、(13)式から、 $a, b \geq e_1 \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $e_2, e_3 \geq f \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $c, d \geq e_4 \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $a, c \geq e_2 \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $e_1, e_4 \geq f \geq \frac{p-1}{2} + 1$, $b, d \geq e_3 \geq \frac{p-1}{2} + 1$ という関係になる。このとき、(17)式 $= \frac{p-1}{2} (e_2 \vee e_3)(a \vee b)(c \vee d) \vee f = f$ 。(18)式 $= \frac{p-1}{2} (f \vee e_2 \vee e_3) \vee f = f$ 。よって(17)式=(18)式。①の場合と同様に②～⑤の場合についても(17)式=(18)式がつねに成り立つことは検索済みである。よって①～⑤の場合には、(9)式、(10)式における x_i' , \bar{x}_i' , $x_i' \bar{x}_i'$ の係数及び定数項はお互いに等しい値をとり、(9)式=(10)式が成り立つ。また、⑥の場合には、(18)<(17) $= \frac{p-1}{2}$ となる。このとき(9)式、(10)式とも x_i' , \bar{x}_i' , $x_i' \bar{x}_i'$ の係数はそれぞれ、 $\frac{p-1}{2}$, $\frac{p-1}{2}$, $\frac{p-1}{2}$ となり(17),(18)式は他の項に吸収されてしまう。よって、結局⑥の場合においても(9)式=(10)式が成り立つ。

一方、 $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, 0)), F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, \frac{p-1}{2}))$ および $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, p-1))$ から得た

$F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$ と $F'(A_{ij}(0, X_j'))$, $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$ および $F'(A_{ij}((p-1, X_j'))$ から得られた $F'(A_{ij}(\frac{p-1}{2}, X_j'))$ が等しいことも同様に証明できる。(証明終)

定理5は $2m$ 値論理関数 $F(X)$ から得られた $(2m+1)$ 値論理関数 $F'(X')$ もまたすべての $(2m+1)$ 値入力ベクトル $A_i'(X_i')$ に対して(1)式を満たすことを保証している。従って, $p=2m$ と $p=2m-1$ の両方に対して同じように $(3, p)$ -関数: $\{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n \rightarrow \{0, 1, \dots, \frac{p-1}{2}, \dots, p-1\}^1$ を考えることができる。さらに, 定理2から $p=2m$, $p=2m-1$ のどちらの場合も $(3, p)$ -関数は, C -単調である。

次に論理式表現される関数の論理式決定法を述べる。すべての p 値入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対して(1)式が成り立つような p 値論理関数 $F(X)$ を考える。いま, 入力ベクトル $A \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n$ に対する出力値 $F(A)$ より得られた $(3, p)$ -関数 $f(x)$ の論理式を $L^{(3, p)}(x)$ とする。この $L^{(3, p)}(x)$ の3値変数 x_i, \bar{x}_i をそれぞれ p 値変数 X_i, \bar{X}_i に変換した p 値論理式を $L^p(X)$ とする。

[定理6] すべての p 値ベクトル $A_i(X_i)$ に対して(1)式を満足するような p 値論理関数 $F(X)$ (または $F'(X')$)は $L^p(X)$ で完全に表現できる。

(証明) 論理式 $L^p(X)$ は p 値AND, OR, NOT, 定数 $0, 1, \dots, p-1$ 及び変数 X_i から構成されている。よって L^p は定理1を満たしている。

(i) $p=2m-1(m=2, 3, \dots)$ のとき

入力ベクトル $A \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n$ に対して $L^p(A) = F(A)$ が成り立つ。一方, (1)式は, s, t, r の値によって $F(A_i(X_i))(X_i \notin \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\})$ の値がただ1つ定まることから L^p は $F(X)$ を完全に表現できる。

(ii) $p=2m(m=2,3,\dots)$ のとき

入力ベクトル $A \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n$ に対して $L^p(A) = F'(A)$ が成り立つ。よって $p=2m$ のときと同様に L^p は $F'(X')$ を完全に表現する。 $F(X)$ は $F'(X')$ の部分関数なので L^p は $F(X)$ を完全に表現している。 (証明終)

定理 6 は論理式 $L^p(X)$ が $F(X)$ (または $F'(X')$) を完全に表現することを示している。

$p=2m$ の場合、与えられた p 値論理関数 $F(X)$ から $F'(X')$ が生成され、その論理式 $L^p(X)$ に定数 $\frac{p-1}{2}$ が存在する。しかし、 $F(X)$ は値 $\frac{p-1}{2}$ を決して出力することはない。よって、 $\frac{p-1}{2}$ を $\frac{p-1}{2}$ に変換した論理式によって $F(X)$ を完全に表現することができる。以上により、すべての p 値ベクトル $A_i(X_i)$ に対して (1) 式を満足する p 値論理関数 $F(X)$ は論理式表現でき、かつその論理式は L^p で表現できることがわかる。

これで定理 1 の逆が言えたことになり結局、 p 値論理関数 $F(X)$ が論理式表現されるための必要十分条件は、 p 値論理関数 $F(X)$ がすべての入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対して (1) 式を満足することであり、その $F(X)$ の論理式 L^p は $F(x)$ の $(3, p)$ -関数の論理式 $L^{(3, p)}$ 内の 3 値変数 x_i, \bar{x}_i をそれぞれ p 値変数 X_i, \bar{X}_i に変換し、さらに $p=2m$ の場合には、 L^p 内の $\frac{p-1}{2}$ を $\frac{p-1}{2}$ に変換することによって得られる。

[例 1] 表 1 に示す 3 変数 5 値論理関数 $F(X)$ を考える。 $F(X)$ はすべての入力ベクトル $A_i(X_i)$ に対して (1) 式を満たしている。表 2 はその $(3, 5)$ -関数 $f(x)$ である。表 2 から分離した $f_1^3(x), f_2^3(x), f_3^3(x), f_4^3(x)$ をそれぞれ表 3, 4, 5, 6 に示す。このとき論理式 $L_1^3(x), L_2^3(x), L_3^3(x), L_4^3(x)$ は、

$$L_1^3(x) = 2(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3), L_2^3(x) = 2(x_1 \vee x_2 \vee x_3)(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3)(\bar{x}_1 \vee \bar{x}_2 \vee \bar{x}_3)$$

$$L_3^3(x) = \bar{x}_1 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3 \vee x_1 x_2 \bar{x}_3 \vee 2(x_1 \vee x_2 \vee x_3)(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3)(\bar{x}_1 \vee \bar{x}_2 \vee \bar{x}_3)$$

$$L_4^3(x) = \bar{x}_1 \bar{x}_2 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3 \vee 2(x_1 \vee x_2 \vee x_3)(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3)(\bar{x}_1 \vee \bar{x}_2 \vee \bar{x}_3)$$

と表される. よって, $L^{(3,5)}(x)$ は,

$$L^{(3,5)}(x) = 1L_1^3(x) \vee 2L_2^3(x) \vee 3L_3^3(x) \vee 4L_4^3(x) = 1(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3) \vee 2(x_1 \vee x_2 \vee x_3)(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3)(\bar{x}_1 \vee \bar{x}_2 \vee \bar{x}_3) \vee 3(\bar{x}_1 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3 \vee x_1 x_2 \bar{x}_3) \vee 4(\bar{x}_1 \bar{x}_2 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3)$$

となり, 結局, 5 値論理関数 $F(x)$ は次の $L^5(x)$ で完全に表現される.

$$L^5(x) = 1(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3) \vee 2(x_1 \vee x_2 \vee x_3)(\bar{x}_1 \vee x_2 \vee \bar{x}_3)(\bar{x}_1 \vee \bar{x}_2 \vee \bar{x}_3) \vee 3(\bar{x}_1 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3 \vee x_1 x_2 \bar{x}_3) \vee 4(\bar{x}_1 \bar{x}_2 x_3 \vee x_1 \bar{x}_2 \bar{x}_3)$$

5. むすび

本文は, 与えられた p 値論理関数が, 論理式表現可能か否かを判定する方法を与え, 更に, その論理式決定法を明らかにした. ここで示された論理式決定法は, 3^n 個の入力ベクトル $A \in \{0, \frac{p-1}{2}, p-1\}^n$ のみを用いるので, 簡単に論理式が決定できる. 一方, ここで示された事実は, C -単調な $(3, p)$ -関数 $f(x)$ が, 論理式表現される p 値論理関数と 1 対 1 対応をなすことを含んでいる. 従って, このことは, 論理式表現される論理関数の数え上げ問題等にも有効となろう.

表1. 5值論理関数 $F(X)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	1	2	3	4
0 0	1	1	2	3	4
0 1	1	1	2	3	3
0 2	2	2	2	3	3
0 3	2	2	2	3	3
0 4	2	2	2	3	3
1 0	1	1	2	3	3
1 1	1	1	2	3	3
1 2	2	2	2	3	3
1 3	2	2	2	3	3
1 4	2	2	2	3	3
2 0	2	2	2	2	2
2 1	2	2	2	2	2
2 2	2	2	2	2	2
2 3	2	2	2	2	2
2 4	2	2	2	2	2
3 0	3	3	2	1	1
3 1	3	3	2	1	1
3 2	2	2	2	2	2
3 3	3	3	2	1	1
3 4	3	3	2	1	1
4 0	4	3	2	1	0
4 1	3	3	2	1	1
4 2	2	2	2	2	2
4 3	3	3	2	1	1
4 4	3	3	2	1	1

表2. (3,5)-関数 $f(x)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	2	4
0 0	1	2	4
0 2	2	2	3
0 4	2	2	3
2 0	2	2	2
2 2	2	2	2
2 4	2	2	2
4 0	4	2	0
4 2	2	2	2
4 4	3	2	1

表5. $f_3^3(x)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	2	4
0 0	0	2	4
0 2	2	2	4
0 4	2	2	4
2 0	2	2	2
2 2	2	2	2
2 4	2	2	2
4 0	4	2	0
4 2	2	2	2
4 4	4	2	0

表3. $f_1^3(x)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	2	4
0 0	2	2	2
0 2	2	2	3
0 4	2	2	2
2 0	2	2	2
2 2	2	2	2
2 4	2	2	2
4 0	2	2	0
4 2	2	2	2
4 4	2	2	2

表6. $f_4^3(x)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	2	4
0 0	0	2	4
0 2	2	2	2
0 4	2	2	2
2 0	2	2	2
2 2	2	2	2
2 4	2	2	2
4 0	4	2	0
4 2	2	2	2
4 4	2	2	0

表4. $f_2^3(x)$

$X_1 X_2 \backslash X_3$	0	2	4
0 0	0	2	2
0 2	2	2	2
0 4	2	2	2
2 0	2	2	2
2 2	2	2	2
2 4	2	2	2
4 0	2	2	0
4 2	2	2	2
4 4	2	2	0

謝辞 本研究を進めるに当たって貴重な資料⁽⁴⁾⁻⁽⁸⁾と有益な御助言を戴いた向殿政男教授(明治大学)に感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 畑, 中島, 大和, 北橋: "2値入力 p 値出力関数から生成される p 値論理関数とその論理式決定" 信学論(D), J71-D, 12, pp.2517-2526(1988)
- (2) 山本, 藤田: "2値しきい値関数と同じ論理式で表される多値多数決関数" 信学論(D), J64-D, 2, pp.172-173(1981)
- (3) 中島, 畑, 大和: "多値論理関数が正関数であるための必要十分条件" 信学論(D), J69-D, 3, pp.488-490 (1986)
- (4) M.Mukaidono: "Regular ternary logic functions --Ternary logic functions suitable for treating ambiguity--" IEEE Trans. Comput. Vol.C-35, pp.179-183,(1986); available in Proc. 13th-ISMVL, pp.286-291 (1983)
- (5) M.Mukaidono: "A set of independent and complete axioms for fuzzy algebra(kleene algebra)", Proc. 11th-ISMVL, pp.27-34 (1981).
- (6) M.Mukaidono: "Some kinds of functional completeness of ternary logic functions", Proc. 10th-ISMVL, pp.81-87 (1980).
- (7) J.Berman, M.Mukaidono: "Enumerating fuzzy switching functions and free kleene algebras", Comp. & Maths. with Appls.10,1,pp.25-35,(1984)
- (8) S.C.Kleene: "Introduction to metamathematics", North-Holland Publishing Amsterdam, pp.332-340 (1952).